

ストレイン理論の妥当性に関する日中比較研究

静岡県立大学大学院
国際関係専攻修士課程二年生
畢 穎統

一、前書き

21世紀に入って、青少年の非行問題は世界でも著しく注目され、特にアジアに属する日本と中国では、社会構造、社会文化と経済成長モデルを新しい時代の変化に従って、深く変化させつつある。それを背景として、青少年非行問題の原因は比較研究を通じて、理論に基づく実証研究を行うような探究が必要である。

犯罪率が増加している中国は、犯罪の発生率を減少しようという非行対策が求めつつある。これに対して、日本では、犯罪率の顕著な増加は見られないが、青少年の心身が健全に成長しようという非行対策が求められる。英米では一つの非行対策を実施するに際しては、その合理性を担保する根拠として一つの非行理論が必要とされるが、日本と中国では理論よりも経験的知恵が先行するという文化の違いがある。対策が（ほとんどは官庁が立案する）理論的基礎を持つことは理論的偏向として逆に嫌われる傾向がある。それゆえ、英米では理論は社会的ニーズのただなかにあると言える。

1938年に、マートンはストレイン理論を提出し、その次に、Cloward and Ohlin. (1960)はマートンの理論に基づいてストレイン理論を発展し、さらにアグニュー (1992年) はマートンの理論によるストレイン源の種類をもっと拡張した。このストレイン理論の発展の流れは、その時ごとにアメ

リカにおける社会状況、経済発展レベル及び文化的な目標と合わせるものである。1940年代のアメリカ全社会は、経済的に豊かではなく、文化的に「アメリカン・ドリーム」が追求されていた。その背景に、生まれたマートンのストレイン理論は、その時 (1950年代) のアメリカの社会状況と似ている中国に対して、犯罪率が高いという問題を解釈できるのではないかと考えている。

その一方、アメリカでは、社会と経済の発展につれて、90年代には経済は豊かになり、文化生活も豊かになった。従って、人々はただ単に経済的な目標を達成することより、生活の中に自分のほしいものとか興味によるものをもっと大切にしたいと感じた。そのめた、生活の出来事にもたらされるほとんどのストレスは人々を困らせる。1992年にアグニューは、アメリカにおいて変化してきた現実をよく理解する上で、ただ金銭的な目標を達成できないという唯一のストレイン源を、生活面に幅広く拡大して一般ストレイン理論を提出した。90年代のアメリカ社会の現状と似ている今の日本の状況は、マートンの古典的ストレイン理論よりアグニューの一般ストレイン理論で、犯罪原因を解釈することにもっと当てはまると考えている。

マートンのストレイン理論は、とりわけ、経済的目標とそれを達成する手段の乖離をストレイン源とする一方、アグニューの一般ストレイン理論

は、経済的目標の不達成に限定されないストレイン源を想定している。日本と中国は、異なる経済発展の時期にあり、日本には、アグニューの一般ストレイン理論が、中国には、マーソンのストレイン理論が当てはまると予測される。本研究は、この予測を検証することを目的とする。本研究の意義は、両国が同じ東アジア圏に属するため、(たとえば、これまで行われた来た、中米と日米の比較研究では避けることができなかつた)大きな「文化差」による攪乱を排除した上で、ストレイン理論の検証を行えることにある。

中国は、1978年の改革開放政策以来、国家の文化的な目標が、共産主義を実現することから、一部の人が先に富を獲得することになり、経済面では計画経済から市場経済に変化した。中国では、社会のすべての構成員に富を得る願望が共通しているものの、それを達成するための合法的な手段は均等に分布しておらず、その結果として、とりわけ、被排除層において、犯罪率が高くなりつつある。そこで、マーソンのストレイン理論が妥当することが予測される。

一方、日本では、経済的發展が一段落し、経済成長率も低下の一途をたどっており、経済的成功はもはや文化的目標の地位を失っている。マーソンのストレイン理論を拡張したアグニューは、その一般ストレイン理論において、ストレイン源として、①(マーソンの経済的ストレインを含む)ポジティブな価値がある目標を達成できないこと、②ポジティブな刺激の喪失、③ネガティブな刺激の提示を挙げている。今の日本の状況では、①よりも②、たとえば、貧困に落ちないこと、あるいは①よりも③、たとえば、貧困そのものがもたらす苦痛が、ストレイン源であると考えられる。そこで、アグニューの一般ストレイン理論が妥当することが予測される。このように異なる経済発展の時期にある両国において異なるストレ

イン理論が妥当することが実証できれば、両国の非行・犯罪の発生メカニズムを明らかにすることができるばかりか、両ストレイン理論が単に競合的であるのではなく、社会条件に対応した相補的な関係にあることを示すことができる。

要するに、マーソンの古典的ストレイン理論もアグニューの一般ストレイン理論も欧米で提出され、アジアの地域に導入するという経過である。中国と日本では、2つのストレイン理論の中に、1つのストレイン理論についての追試的研究または事例解釈においての理論的妥当性の研究などは日本と中国で行われている。しかし、両国においての2つのストレイン理論モデルを、包括的に実証するような研究はまだ行われていない。本研究は初めて、同じ漢字文化を持つといっても、違う社会文化目標や社会制度の日本と中国では、在籍する大学生のデータを用いてマーソンのストレイン理論とアグニューの一般ストレイン理論を同時に、検証するものである。マーソンのストレイン理論とアグニューの一般的ストレイン理論に関する各項目を統計的に最尤法でプロマックスで抽出して、その得点で犯罪変数に回帰分析を行う。だから、中国と日本ではマーソンの古典的ストレイン理論とアグニューの一般ストレイン理論の妥当性を量的に検証することができ、両国の比較結果はこれからの研究の参考となる。分析結果により、両国の間で類似点があるとしたら、ストレイン理論における主要な理論的な命題を支えるだけではなく、異文化ともに2つのストレイン理論モデルを有効にする。また、相違点があるとしたら、2つのストレイン理論を異なる文化にも適応するように訂正する。

二、目的

本研究はマーソンのストレイン理論とアグニューの一般ストレイン理論の妥当性を、日本と中

国の大学生を対象にして調査を行い、実証することである。また、以上の問題意識に基づいて、マートンのストレイン理論とアグニュー一般ストレイン理論の基本定理から導かれる以下の2つの仮説を立てた。

■仮説1 :非行に対するマートンのストレイン理論の妥当性は、中国のほうが日本より大きいと予想する。

■仮説2 :非行に対するアグニューの一般ストレイン理論の妥当性は、日本のほうが中国より大きいと予想する。

三、データ、変数と分析

第1節 サンプル

本研究は、2つのサンプルで構成し、1つは日本の大学と専門学校に在籍する大学生のサンプルで、もう1つは中国の高校と大学に在籍する学生を対象にしたサンプルである。日本のサンプルは大学と専門学校から集中し、地域的に関東地方から九州地方まで分布した。中国のサンプルは黒竜江省のハルビン市の高校と大学、北京にある大学からデータである。

日本のデータは2012年10月から11月まで各学校で調査を実施した。対象校は大学と専門学校6校であり、地域分布は東北地方2校、東海地方2校と九州地方2校でデータを取った。東北地方の2校と九州地方の2校のデータは、学校の先生に頼んだ後、回答を郵送で回収した。東海地方の2校は著者自身で行った。有効回答質問票は452部、男子は、47.1パーセントで、学年を見ると一年生が62.6パーセントでもっとも多い、年齢は18歳から20歳までの調査者が90パーセント以上を占めていた(表1)。

中国では、2012年9月12日から10月3日まで中国の対象校で調査を行った。対象校は地理的に内陸の東北地方、北京と中原地方(湖南省)に分

布して、学校類型は公立と私立である。また、調査対象校は大学3校、専門学校1校と高校が2校である。質問票については、有効回答質問票は1097部である。性別割合は日本とほぼ同じで男子が47.8パーセントを占めた。中国のデータの年齢は、高校生も対象にしたので、日本のデータ年齢より範囲が大きくなった。16歳から23歳までが91.7パーセントであり、一年生から三年生が調査の主体で98.9パーセントとなった。

調査の実施については、調査対象者主体の授業を担当する教員の承諾に基づいて、本調査の目的と概要を説明して、個人の自由意志に基づいて参加するかしないかは自分で決めてもらった。調査する前には、この調査は当大学とは関りのない本研究の著者によって全て匿名で行われ、回答を全てデジタル化しコンピュータに入力した後、全調査票は破棄されることを調査対象によく説明した。なお、各教室で実施された調査票の配布から回収に至る全行程(40分程度)は、本研究の著者が全て執り行った。

		中国			日本		
		人数	有効百分率	累積百分率	人数	有効百分率	累積百分率
性別: 1=男子 2=女子	1	477	47.3	47.3	209	47.1	47.1
	2	531	52.7	100.0	235	52.9	100.0
	合計	1008	100.0		444	100.0	
年齢: 1=15歳以下 2=16歳; 3=17歳; 4=18歳; 5=19歳; 6=20歳; 7=21歳; 8=22歳; 9=23歳; 10=24歳以上	1	5	.5	.6			
	2	76	7.6	8.1			
	3	240	23.9	31.9			
	4	83	8.3	40.2	106	23.9	23.9
	5	71	7.1	47.3	185	41.7	65.5
	6	209	20.8	68.1	54	12.2	77.7
	7	189	18.8	86.9	56	12.6	90.3
	8	110	10.9	97.8	23	5.2	95.5
	9	20	2	99.8	9	2.0	97.5
	10	2	.2	100	11	2.5	100.0
	合計	1005	100		444	100.0	
学年: 1=1年生; 2=2年生; 3=3年生; 4=4年生/4年生以上	1	6	.6	.6	278	62.6	62.6
	2	595	59.6	60.2	78	17.6	80.2
	3	386	38.7	98.9	44	9.9	90.1
	4	11	1.1	100.0	44	9.9	100.0
	合計	998	100.0		444	100.0	

第2節 変数

このデータは、マートンの古典ストレイン理論に関する変数とアグニューの一般ストレイン理論に関する変数を含んでいる。そして、仮説に述べたように、犯罪非行との関係を実証するために、犯罪非行の変数も入れた。

1. 従属変数

犯罪や類似犯罪尺度

犯罪に関する尺度項目は、全部で17個あり、その中の13個は先行研究を参考にしたもので、あと4個は自分で作ったものである。「警察に呼び止められたことはありますか」と「警察に逮捕されたことはありますか」は直接に犯罪行動をやったことを聞く質問だと考えた上で入れた。もう一つは「インターネットなどからコピーした資料をそのままレポートに使ったことはありますか」という質問であるが、今のインターネットの時代の犯罪類似行為として、この項目を含めた。残った13個は、「人のものやお金を黙って取ったこと」、「知らない人の家や店などの建物に勝手に入ったこと」、「他の人の自転車、原付、バイクを勝手に乗ったこと」、「家出したこと」、「気分を変える薬を使ったこと」(Mazerolle, 1994:91; Agnew, 1996:703; Burton et al., 1994)。「店の品物を代金を払わずにもってきたこと」、「誰かにケンカを売ったこと」、「人に暴力を振るったこと」(Agnew, 2002:56; Burton et al., 1994)。「公共の場でものを壊したり、いたずらしたりしたこと」、「無賃乗車したこと」、「無免許で運転したこと」(Berzina, 1996:60)。「友達と深夜まで遊び回ったこと」、「ギャンブルをしたこと」、「セックスを売ったり買ったりしたこと」(Agnew, 1996:703; Burton et al., 1994)。リストのような非行行動ないし類似非行行動を過去1年間に何回くらいしたことがあるか聞き、答えは「ない」、「1、2回」と「3回以上」の三つがある。そして、

各項目を足し算で総得点を取り、それを次の回帰分析の段階で従属変数(犯罪変数)の得点として扱った。

2. 説明変数

マートンのストレイン変数

全て六つの尺度を設定し、回答者は1=とても当てはまる、5=まったく当てはまらないという範囲の中でい自分に合う選択肢を一つ選ばせる。

先行研究により、ストレインを概念化する方法が三つあり、それぞれ経済的な願望と期待とのギャップ、経済的な機会の妨害を認知すること、相対的な剥奪ある。経済願望は、将来に金をもうける「全体的、あるいは普遍的」な欲望である、それに対して、期待というのは、将来「金をもうける」を信じる人における実際に存在した機会である。したがって、マートンのストレイン理論の推定による、経済願望と経済希望のギャップが大きいほど、個人に対してストレインを強く体験することになる。ここでは、Farnworth and Leiber(1989)の提案のように、経済的側面における願望と期待を測定し、「将来ほしだけの収入が得られると思う」、「将来ほしだけの収入が得られる見込みがない」という2つの質問を設定した。経済的願望については、「将来ほしだけの収入が得られると思う」という質問に答えさせ、また、経済的期待のほうが、将来ほしだけの収入が得られる見込みがないという質問を聞いた。お金をたくさんもうけるという願望を高いほど、お金をたくさんもうけるという期待はないという認知をした回答者は、説明したように、経済的願望と経済的期待のギャップを体験することになってしまった。それ以外のパターンの回答者は、目標一手段のギャップがないと見なされる。

マートンのストレイン変数を利用するのは、Hirschi(1969)の研究から、ほとんどのストレ

イン理論における実証研究では、願望と期待の間のギャップをストレインを測定するように使い続けるからである (Cheung and Ng, 1988; Eve, 1978; Figueira-McDonough, 1983; Paternoster and Triplett, 1988; Shue, 1988; Smith and Paternoster, 1987)。

その上、本研究は職業についての願望と期待の尺度を入れたが、それは職業を通じて、経済の願望と期待のギャップだけではなく、経済と社会地位を得られるかどうかというギャップも測定するつもりで、二つの質問をセットした。「将来ちゃんとした仕事につける見込みがないと思う」、「将来就きたい仕事に就けると思う」に関する処理方法は前に述べたと同じように扱う。

また、ストレインは、相対的に剥奪される時にも感じると定義され、それについては、2つの項目を設定した。それぞれ、「努力しても目標は達成できないだろう」(Merton, 1938 : 672)、「コネがあれば私の人生はもっとうまくいったはずである」(Burton, 1994) である。

アグニューの一般ストレイン変数

アグニューの一般ストレイン変数を測定する場合は、以下の状況を言及しなければならない。親の拒否、親の監視/懲戒が厳しい、子どもの虐待、高校の負の経験 (例えば、成績がよくない、先生との負の関係、学校に対する嫌な経験)、友達との虐待の関係 (例えば、侮辱、脅威、身体の暴行)、犯罪被害などである (Agnew, 2006 : 71-74 ; Agnew 2009:General Strain Theory:Current Status and Directions for Further Research, Cullen, Wright and Blevins 『Taking Stock:The status of Criminological Theory』 :116) 。本研究は、前述の枠組に基づいて、項目を六つ作り、家族ストレイン項目、子ども虐待項目、虐待のピア関係項目、学校憎しみ項目、犯罪被害の項目と目標 (興奮、権力) の不達成項目である。

* 家族ストレイン項目。この項目では、親は子どもを拒否することや、親の関係が良くない雰囲気と家族が子どもに対して安心して暖かくさせない家庭環境などの内容を含んだ。従って、以下の質問になった。「親は私を悪い子どもだと思っている」、「親から愛されていないと思う」(Agnew, 2002:52 ;Mazerolle, 1998:89)。「親の仲が悪い」、「私の親のしつけは一貫性がない」(Agnew, 2002:52)。「家が居場所であるという実感が無い」と「家で差別されたことがある」という二つの質問 (Agnew, 2002:50) を聞いた。回答者は「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」という5段階の選択肢から自分のことにあう答えを一つ選ぶことになる。

* 子ども虐待項目。「親から馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある」、「親からいじめられたことがある」、「親から殴られたり蹴られたりしたことがある」(Agnew, 2006:71)。

* 虐待のピア関係項目。「友だちから馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある」、「友達からいじめられたことがある」、「友達から殴られたり蹴られたりしたことがある」、「仲間はずれにされたことがある」(Hinduja and Patchin, 2007:98-99; Agnew, 2006:72)。

* 学校憎しみ項目。「学校が居場所であるという実感が無い」、「学校で差別されたことがある」、「学校の成績がよくない」、「学校に行くことは時間の無駄だ」、「学校には友だちがいない」(Paternoster and Mazerolle, 1994:241-242; Agnew, 2002 :51 ; Johnson and Kercher, 2007:139 ; Agnew, 2006 『Pressured Into Crime』 :72)。

* 犯罪被害の項目。「自分のものやお金が盗まれたこと」、「自分の家や店などの建物に勝手に入られたこと」、「自分の自転車、原付、バイクを持って行かれたこと」、「誰かにケンカを売ら

れたこと」、「人に暴力を振るわれたこと」(Baron, 2004:468 :Agnew, 「Experienced, vicarious, and anticipated strain: An exploratory study on physical victimization and delinquency」 2006:617-619)。

* 目標（興奮、権力）の不達成項目。「自分の人生が自分の自由にならないように感じる」と「自分の人生には、スリル（興奮）が不足している」(Krohn and Lizotte, 2009, *handbook on Crime and Deviance*, chapter 9 General strain theory edited by Agnew, 174)。

第3節 分析

分析戦略

本研究は、日中両国でマートンのストレイン理論とアグニューの一般的ストレイン理論を比較して実証する予定で、変数に関する項目が多いため、2段階の分析に分けて行う。第1段階はマートンの変数とアグニューの変数を最尤法・プロマックス回転による因子分析によって因子を抽出し、回帰法により因子得点を算出した。犯罪の変数については、各項目の得点を平均数になって平均値を取る。因子分析ソフトSPSSを使って、共通潜在因子を抽出することを試みた。本研究では、最尤法を用い、回転は基準プロマックス法によった。

中国のデータについて、プロマックス回転を行った時の因子についての因子負荷量の二乗和と寄与率を表2と表3に示した、各因子の因子負荷量二乗和が全て1以上になった。マートンの変数は二つの因子を抽出し、アグニューの変数は五つの主因子を取った。

1、中国のデータについての回転後の因子の解釈

回転後の因子負荷量は、因子と各変数との相関係数を意味することから、各因子に次のような解

釈によって、以下のような名称をつけた。マートンの変数については、最尤法・プロマックス回転の因子分析を実施した結果、固有値1以上、累積寄与率は63.29パーセントで、2因子抽出され因子の解釈を行った（表2）。

マートン因子1：願望と不達成の見込みの乖離

変数では、「将来欲しいだけの収入が得られる見込みがない」と相関が高く、「将来ちゃんとした仕事に就ける見込みがないと思う」とやや相関が高い。「努力しても目標は達成できないだろう」、「コネがあれば私の人生はもっとうまくいっていたはずである」と相関する。この因子は、願望と期待の乖離を表す要素の側面を表している。

マートン因子2：願望達成の見込みの乖離

変数では、「将来欲しいだけの収入が得られると思う」と相関が高く、「将来就きたい仕事に就けると思う」とやや相関が高い。この因子はマートンの期待と実際の結果の乖離に結び付けようとする因子と解釈できる。

表2 中国：マートンのストレイン変数についてのパターン行列*

	因子	
	1	2
将来ほしだけの収入が得られる見込みがない	.834	.064
将来ちゃんとした仕事につける見込みがないと思う	.799	-.031
努力しても目標は達成できないだろう	.479	-.045
コネがあれば私の人生はもっとうまくいっていたはずである	.293	.001
将来ほしだけの収入が得られると思う	-.026	1.004
将来就きたい仕事に就けると思う	.013	.658
因子抽出法：最尤法		
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法		
a. 5回の反復で回転が収束しました。		

アグニューの一般ストレイン変数については、最尤法・プロマックス回転の因子分析を実施した結果、固有値1以上、累積寄与率は63.37パーセントで、4因子抽出され因子の解釈を行った（表3：付録）。

アグニュー因子1：親からの疎外感

変数では、「親から愛されていないと思う」、「親は私を悪い子どもだと思っている」という項目の負荷量はそれぞれ.952と.911で非常に相関が高く、「家で差別されたことがある」、「家が居場所であるという実感がない」、「親の仲が悪い」とやや相関が高く、「学校で差別されたことがある」という項目は負荷量が.390パーセントしか関連しないため、採用されなかった。この因子は家庭の中でストレスを体験することを表している。採用されなかった。

アグニュー因子2：人生/学校の無意味感

変数では、「自分の人生には、スリル（興奮）が不足している」、「自分の人生が自分の自由にならないように感じる」と相関が高く、「学校が居場所であるという実感がない」、「学校には友だちがいない」、「学校に行くことは時間の無駄だ」、「学校の成績がよくない」とやや相関が高い。「私の親のしつけは一貫性がない」と関連しているが負荷量.256なので採用されなかった。この因子は学校憎しみを表すような因子と解釈できる。

アグニュー因子3：友人とのネガティブな関係

変数では、「友だちからいじめられたことがある」の負荷量が.909で相関が強く、「友だちから殴られたり蹴られたりしたことがある」、「友だちから馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある」、「仲間はずれにされたことがある」とやや相関が高い。この因子は友達とのネガティブな関係を示している。

アグニュー因子4：子ども虐待

変数では、「親から馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある」、「親からいじめられたことがある」、「親から殴られたり蹴られたりしたことがある」とやや相関が高く、子ども虐待の因子と名づける。

犯罪被害項目

変数では、「誰かにケンカを売られたこと」、「人に暴力を振るわれたこと」、「自分の自転車、原付、バイクを持って行かれたこと」、「自分のものやお金が盗まれたこと」、「自分の家や店などの建物に勝手に入られたこと」という変数の答えは、「0回（ない）」、「1、2回」と「3回」を3段階でアグニューのほかの尺度の答えと違っているので、独自で足し算で計算することになった。

2、日本のデータについての回転後の因子の解釈
回転後の因子負荷量は、因子と各変数との相関係数を意味することから、各因子に次のような解釈によって、以下のような名称をつけた。マートン

	因子
	1
将来就きたい仕事に就けると思う	.721
将来ちゃんとした仕事につける見込みがないと思う	.673
将来ほしいだけの収入が得られる見込みがない	.655
将来ほしいだけの収入が得られると思う	.561
努力しても目標は達成できないだろう	.511
コネがあれば私の人生はもっとうまくいっていたはずである	.326
因子抽出法：最尤法	
a. 1 個の因子が抽出されました。	
4 回の反復が必要です。	

の変数については、最尤法・プロマックス回転の因子分析を実施した結果、固有値1以上、累積寄与率は44.83パーセントで、1因子抽出され因子の解釈を行った（表4）。

マートン因子1：願望と期待の乖離

変数では、「将来就きたい仕事に就けると思う」と関連が高い、「将来ちゃんとした仕事につける見込みがないと思う」、「将来ちゃんとした仕事に就ける見込みがないと思う」、「将来欲しいだけの収入が得られる見込みがない」、「努力しても目標は達成できないだろう」と関連がやや高く、「コネがあれば私の人生はもっとうまくいったはずである」と相関する。この因子はマートンの願望への乖離に結び付けようとする因子と解釈できる。

アグニューの一般ストレイン変数については、最尤法・プロマックス回転の因子分析を実施した結果、固有値1以上、累積寄与率は62.59パーセントで、5因子抽出され因子の解釈を行った（表5：付録）。

アグニュー因子1：家族ストレイン

変数では、「親から愛されていないと思う」、「家が居場所であるという実感がない」と関連が高く、「家で差別されたことがある」、「親は私を悪い子どもだと思っている」、「私の親のしつけは一貫性がない」、「親から馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある」、「親の仲が悪い」「親からいじめられたことがある」とやや相関が高く、「自分の人生が自分の自由にならないように感じる」の負荷量が.239で、この項目に採用されなかった。この家庭の中でストレスを体験することを、この因子ではっきり示した。

アグニュー因子2：友人とのネガティブな関係

変数では、「友だちからいじめられたことがある」という項目の負荷量が.930で関連が強い。「仲

間はずれにされたことがある」、「友だちから馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある」と相関が強く、「友だちから殴られたり蹴られたりしたことがある」、「学校で差別されたことがある」とやや相関が高い。この因子は友達とのネガティブな関係を示している。

アグニュー因子3：学校の無意味感

変数では、「学校が居場所であるという実感がない」と相関が高く、「学校には友だちがいない」と「学校に行くことは時間の無駄だ」とやや相関が高い。この因子は学校憎しみを表すような因子と解釈できる。

アグニュー因子4：親からの暴力

変数では、「親から殴られたり蹴られたりしたことがある」の負荷量が.912で強く関連することが示した。

アグニュー因子5：学校成績

「学校の成績がよくない」と関連し、「自分の人生には、スリル（興奮）が不足している」の負荷量が.201で、採用されなかった。

犯罪被害項目

変数では、「誰かにケンカを売られたこと」、「人に暴力を振るわれたこと」、「自分の自転車、原付、バイクを持って行かれたこと」、「自分のものやお金が盗まれたこと」、「自分の家や店などの建物に勝手に入られたこと」という変数の答えは、「0回（ない）」、「1、2回」と「3回」を3段階でアグニューのほかの尺度の答えと違っているので、独自で足し算で計算することになった。

四、結果

中国の結果は、表6に示すように、マートンのストレイン理論によるストレインは、有意に犯罪に影響するのではないことを示した。つまり、マートンのストレイン因子1（願望と期待の乖離）とマートンのストレイン因子（期待と実際の結果

の乖離は、犯罪変数に統計的に有意な影響を与えなかったことが示された。マートンのストレイン理論を実証した結果に対して、アグニューの一般ストレイン理論を実証する結果によって、アグニュー因子1（親からの疎外感因子）とアグニュー因子4（子ども虐待因子）の2つ因子は統計的に有意ではないことが示されたが、アグニュー因子2（人生/学校の無意味間因子）、アグニュー因子3（友人とのネガティブな関係因子）とアグニュー因子5（犯罪被害因子）の3つの因子は有意であることを示唆した。つまり、学校に対する無意味感を持つほど、犯罪を行う傾向がある（ $\beta_{\text{人生/学校無意味感}} = .105, p < .05$ ）。友人との関係が良くないほど、犯罪の傾向が高い（ $\beta_{\text{友人とのネガティブな関係}} = .102, p < .05$ ）。また、犯罪被害を受けるほど、犯罪を行う可能性が高くなったことが示唆された（ $\beta = .404, p < .001$ ）。また、年齢は、犯罪に有意的な影響を与えることが示された。年齢が上がるほど、犯罪を引き起こす傾向がある（ $\beta_{\text{年齢}} = .121, p < .001$ ）要するに、中国のデータの分析結果によって、マートンのストレイン理論による仮説を支持されなかったが、アグニューの一般ストレイン理論による仮説が支持された。

表6 中国：犯罪をマートン因子とアグニュー因子に回帰する回帰分析の係数*

モデル		い係数		標準化係数		有意確率	共線性の許容度
		B	標準誤差	ベータ	t値		
1	(定数)	12.555	.600		20.908	.000	
	性別	-.268	.187	-.044	-1.539	.124	.938
	年齢	.193	.047	.121	4.072	.000	.882
	マートン因子1：願望と不達成の期待の乖離	-.202	.122	-.056	-1.657	.098	.688
	マートン因子2：願望達成の見込みの乖離	.132	.094	.041	1.411	.159	.937
	アグニュー因子1：親からの疎外感	-.108	.168	-.030	-0.630	.529	.339
	アグニュー因子2：人生/学校の無意味感	.370	.166	.105	2.233	.026	.351
	アグニュー因子3：友人とのネガティブな関係	.358	.167	.102	2.138	.033	.339
	アグニュー因子4：子ども虐待	.116	.142	.032	.818	.413	.510
	犯罪被害	.927	.066	.404	13.974	.000	.930

a. 従属変数：犯罪

日本の結果は表7に示すように、マートンのストレイン理論による仮説が支持されなかったが、アグニューの一般ストレイン理論による仮説が支持された。アグニューの一般ストレインの犯罪

被害因子は、犯罪に著しく有意的に影響を与えることを支持した（ $\beta_{\text{犯罪被害因子}} = .343, p < .001$ ）。また、ジェンダーの差は犯罪に有意に影響を与えると示唆した。つまり、男子は女子より、犯罪を引き起こす傾向が強い（ $\beta_{\text{性別}} = -.205, p < .001$ 。（男子=1、女子=2））。

表7 日本：犯罪をマートン因子とアグニュー因子に回帰する回帰分析の係数*

モデル		標準化されていない係数		標準化係数		有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ	t値		許容度	VIF
1	(定数)	16.787	.983		17.070	.000		
	性別	-1.603	.353	-.205	-4.540	.000	.889	1.125
	年齢	.150	.120	.055	1.250	.212	.939	1.065
	マートン因子1：願望と期待の乖離	-.022	.204	-.005	-1.109	.913	.846	1.182
	アグニュー因子1：家庭ストレイン	.447	.275	.109	1.627	.105	.404	2.477
	アグニュー因子2：友人とのネガティブな関係	-.337	.229	-.081	-1.469	.142	.587	1.705
	アグニュー因子3：学校の無意味感	-.335	.262	-.076	-1.279	.202	.510	1.960
	アグニュー因子4：親からの暴力	.020	.242	.005	.084	.933	.515	1.940
	アグニュー因子5：犯罪被害	.427	.266	.078	1.603	.110	.756	1.322
	学校成績	.871	.114	.343	7.626	.000	.891	1.123

a. 従属変数：犯罪

中国と日本においてアグニューの一般ストレイン理論による仮説は支持された。中国では、学校憎しみストレイン、不良友人との関係ストレインと犯罪被害ストレインの3つの因子は犯罪に正の影響を与え、特に犯罪被害ストレインという因子は著しく犯罪への効果があることを示した（ $\beta = .404, p < .001$ ）。日本で、アグニューの一般ストレイン変数の中に、唯一、犯罪被害ストレインだけは、犯罪に正の影響を与えることを示した。以上の結果によって、犯罪被害を受ける人は、社会に対して同様な行動（犯罪の形）で自分のストレインを発散することを説明できる。

五、考察

以上のように、ストレイン理論の妥当性に関する日中比較研究について、本研究では、いくつかの示唆を得ることができたが、いくつか課題も残った。

回帰分析の結果により、中国と日本両国におけるマートンのストレイン理論による仮説1が支持されなかった。この仮説1は支持されるか、支

持されないかという結果そのものは問題ではなく、研究の結果を出るのに左右する要素が正しくコントロールされるかということを再度考えてみると、おそらく以下の3つ点ある。

1、先行研究の段階では、中国と日本の社会の現状と人々の心理状態に関する背景を理解することは不十分であり、社会の現状についての資料や調査があっても、部分的であるかもしれない。例えば、「表5. 2の変数の記述統計」によるマートンの変数：「将来ほしだけの収入が得られる見込みがない」については、中国の平均値は3.88で、日本はほぼ2.94である（1＝とても当てはまる、5＝全く当てはまらない）。この尺度は金銭的な目標の不達成によるストレインを測定するために作成されるのもである。仮説1によって、中国の結果は日本の結果より高い予想だとしても、実際の結果は日本の方が高いことを示した。このような仮説と逆になった結果を生み出すことは、中国と日本の社会現状と人々の心理状態に関する知識や資料を理解することが不十分からである。従って、今後の研究はその方面に注意すべきである。

2、本研究は、横断的な研究で一時的な事件で影響される可能性が高い、例えば、中国で調査を行う際に、反日デモが高まっている時期で、著者は調査を実施する前に、質問票をただ学術のために使うと説明しても、答えが反日デモという情緒に影響されてしまう可能性がある。例えば、中国の大学生は、日本と関連がある研究に対して心理的な違和感を持つため、実際に行った犯罪や類似犯罪行動は報告されなかったり、報告したデータの中に本人の実際の状況とずれたりするように回答する可能性がある。「表5. 3の変数記述統計」を再度考察してみる。質問票には、犯罪に関する質問はすべて17個ある。記述統計の結果によっては、中国における15個犯罪尺度の得点平均値は、

日本の犯罪尺度の得点平均値より低いことが示された（「気分を変える薬を使ったこと」と「インターネットなどからコピーした資料をそのままレポートに使ったこと」の2つの質問を除く）。反日デモの影響を受けた中国の犯罪尺度の分布は、傾きになる可能性があり、犯罪の従属変数をストレイン変数に回帰する回帰分析の結果に影響を与えてしまった。従って、傾き分布した犯罪尺度の得点で回帰分析を行う際に、回帰効果の強さを示す β 係数は、弱められることになった。犯罪に有意な影響を与えるべきな変数は、傾きの影響で有意ではなくなり、犯罪への影響が有意であると示した変数は、 β 係数が弱められることである。今後の研究は、反日デモのような一時事件の影響を受けないために、社会的な事件の時期に調査を行わない、あるいは横断的な研究の変わり、縦断研究で一時的な事件の影響を修正するという方法で行う。

3、本研究において、大多数の調査対象は大学生である。サンプルは特定の調査対象に集中しすぎると、そのサンプルで推測した結果が、母集団の状況を十分に表せなくなる可能性がある。例えば、中国では、サンプルが大学生と高校生である。中国では日本の状況と違い、アルバイトのような仕事はほとんどないため、大学生と高校生は大部分の学費と生活費が親からもらうものである。そこで、中国の学生たちは日本の学生のように、できるだけ自分で学費、家賃及び生活費を負担するほどのストレスを持っていない。従って、そもそも労働階層に最も適用するマートンのストレイン理論は、今回の中国の大学生と高校生を調査対象にしたデータを用いるため、マートンの理論による仮説に有意に支持されなくなった可能性がある。例えば、「表5. 3の変数の記述統計」の「将来欲しいだけの収入を得られる見込みはない」という質問については、中国の平均値は3.88で、日本

の平均値は2.94である（1＝とても当てはまる、5＝全く当てはまらない）。この結果によって、中国の学生は金銭的な目標の不達成によるストレインが低いことを示した。従って、マートンのストレイン理論に対しては、サンプルの選択は特に重要であり、データに労働階級のサンプルが含まれ、より広い範囲の職業のサンプルが包含されるのが望しい。

将来、ストレイン理論の妥当性に関するアジアへの適用についての実証研究は、以下のことは必要であると考えている。

1、そもそも欧米文化の土地から生まれたストレイン理論は、アジア地域への適用に実証研究を行う際に、地元の文化に合うストレイン尺度を選択し、修正する可能性があることをちゃんと考えなければ、望ましい結果が現実の状況とずれ、質問の設定の不適合で期待する結果が出られない可能性がある。そのため、先行研究段階では、対象国の文化とその国の人における意識と行動好み及び犯罪傾向に関する知識を備える必要がある。例えば、今回調査のアンケートの形式及びに設問が適切であったかどうかについては、今後、検査が必要であろうし、その結果についても、学生のサンプル限りのものである。本研究において、のサンプルによる分析結果は偏る可能性があるため、今後の研究は、調査対象の範囲をできるだけ幅広くするように設計する。

2、将来、アグニューのストレイン理論に関するアジアへの適用研究は、アグニューの理論により、ストレインは直接に犯罪に影響を与えるという効果のほか、犯罪への影響がコーピングという条件変数を条件付けると主張された（Agnew, 2009）。だから、GSTについて異なる国の文化背景のデータを用いて比較研究を行う際に、条件変数としてのコーピング変数を導入してもらうこと

を考えてほしい。国の文化によるコーピングの傾向が異なる。異文化の背景でGSTにおける比較研究を行う場合、コーピング変数はそれぞれの文化背景の役割を拡大するため、ストレインが犯罪への直接な影響という作用より、犯罪に間接的な影響を著しくなる。だから、今後の研究に対しては、コーピング変数はアグニューの一般ストレイン理論を実証する場合、実証する必要な点である。本研究は、質問票の中にコーピング変数があるが、今回時間のため分析に入れなかった。

3、本研究は、中国と日本でストレイン理論しか実証しなかった。今後、アジアでは、犯罪学に関する実証研究は社会統合理論、社会学習理論とストレイン理論を1つの研究に実証を試みられる。三つの犯罪原因論は、中日以外のアジア国のサンプルも持ち、そこへ適用するかどうか実証できるばかりか、アジアの国における非行・犯罪の発生のメカニズムを明らかにすることができる。

引用文献

- Agnew, Robert. (1984). "Autonomy and Delinquency." *Sociological Perspectives* 27:219-36.
- Agnew, Robert. (1985). "A Revised Strain Theory of Delinquency." *Social Forces* 64:151-67.
- Agnew, Robert. (1990). "The Origins of Delinquent Events: An Examination of Offender Accounts." *Journal of Research in Crime and Delinquency* 27:267-94."
- Agnew, Robert. (1992). "Foundation for a General Strain Theory of Crime and Delinquency." *Criminology* 30:47-87."
- Agnew, Robert. (1995a). "Strain and Subcultural Theories of Criminality." In *Criminology: A Contemporary Handbook*,

- edited by Joseph F. Sheley. Belmont, CA: Wadsworth."
- Agnew, Robert. (1995b). "The Contribution of Social-Psychological Strain Theory to the Explanation of Crime and Delinquency." In *The Legacy of Anomie Theory, Advances in Criminological Theory*, Vol. 6, edited by Freda Adler and William S. Laufer. New Brunswick, NJ: Transaction.
- Agnew, Robert. (1995c) "Testing the Leading Crime Theories: An Alternative Strategy Focusing on Motivational Processes." *Journal of Research in Crime and Delinquency* 32:363-98.
- Agnew, Robert. (1995d). "Controlling Delinquency: Recommendations from General Strain Theory." In *Crime and Public Policy*, edited by Hugh D. Barlow. Boulder, CO: Westview.
- Agnew et al. (1996.) A new test of classic strain theory. *Justice Quarterly*, 13, 681-704
- Agnew, Robert. (1997). "Stability and Change in Crime over the Life Course: A Strain Theory Explanation." In *Developmental Theories of Crime and Delinquency, Advances in Criminological Theory*, Vol. 7, edited by Terence P. Thornberry. New Brunswick, NJ: Transaction."
- Agnew, Robert. (1999). "A General Strain Theory of Community Differences in Crime Rates." *Journal of Research in Crime and Delinquency* 36:123-55.
- Agnew, Robert. (2001a.) "An Overview of General Strain Theory." In *Explaining Criminals and Crime*. edited by Raymond Paternoster and Ronet Bachman. Los Angeles: Roxbury.
- Agnew, Robert (2001b). *Juvenile Delinquency: Causes and Control*. Los Angeles: Roxbury.
- Agnew, Robert. (2006). *pressured into crime: an overview of general strain theory*. Roxbury Publishing Company.
- Agnew, R., & Brezina, T. (1997). Relational problems with peers, gender, and delinquency. *Youth & Society*, 29, 84-111.
- Agnew, Robert and Helene Raskin White. (1992) "An Empirical Test of General Strain Theory." *Criminology* 30:475-499.
- Agnew, Robert, Francis T. Cullen, Velmer S. Burton, Jr., T. David Evans, and R. Gregory Dunaway. (1996). "A New Test of Classic Strain Theory." *Justice Quarterly* 13:681-704.
- Aseltine, R. H., Jr., & Gore, S. L. (2000). The variable effects of stress on alcohol use from adolescence to early adult. *Substance & Misuse*, 35, 643-668.
- Aseltine, Robert H., Jr., Susan Gore, and Jennifer Gordon. (2000) "Life Stress, Anger and Anxiety, and Delinquency: An Empirical Test of General Strain Theory." *Journal of Health and Social Behavior* 41:256-275.
- Baron, Stephen W. and Timothy F. Hartnagel. (1997). "Attributions, Affect, and Crime: Street Youths' Reactions to Unemployment." *Criminology* 35:409-434.

表3 中国：アグニューのストレイン変数についてのパターン行列

	因子			
	1	2	3	4
親から愛されていないと思う	.952	-.079	.000	-.030
親は私を悪い子どもだと思っている	.911	-.033	-.044	.025
家で差別されたことがある	.795	-.027	-.018	.119
家が居場所であるという実感がない	.672	.101	-.062	.149
親の仲が悪い	.641	.044	.131	-.038
学校で差別されたことがある	.390	.283	.225	-.092
自分の人生には、スリル（興奮）が不足している	-.047	.713	-.123	.052
自分の人生が自分の自由にならないように感じる	-.149	.688	-.041	.125
学校が居場所であるという実感がない	-.004	.678	.108	-.032
学校には友だちがいない	.137	.638	.050	-.096
学校に行くことは時間の無駄だ	.263	.623	-.084	-.051
学校の成績がよくない	.008	.533	.027	.024
私の親のしつけは一貫性がない	.130	.256	.211	.031
友だちからいじめられたことがある	.015	-.093	.909	.006
友だちから殴られたり蹴られたりしたことがある	.239	-.087	.713	-.062
友だちから馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある	-.157	.070	.558	.249
仲間はずれにされたことがある	-.087	.325	.456	.004
親から馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある	.007	.062	-.033	.759
親からいじめられたことがある	.177	-.024	-.004	.703
親から殴られたり蹴られたりしたことがある	.006	.012	.217	.508

因子抽出法：最尤法。回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法。6回の反復で回転が収束しました。

表5 日本：アグニューのストレイン変数についてのパターン行列*

	因子				
	1	2	3	4	5
親から愛されていないと思う	.823	-.094	.098	-.094	-.026
家が居場所であるという実感がない	.815	-.002	-.025	-.006	-.066
家で差別されたことがある	.747	.086	-.009	-.033	-.080
親は私を悪い子どもだと思っている	.700	-.047	.014	.005	.160
私の親のしつけは一貫性がない	.622	.068	-.041	-.107	.115
親から馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある	.578	.121	-.142	.180	.084
親の仲が悪い	.540	-.006	.015	.031	-.118
親からいじめられたことがある	.533	-.054	.108	.318	-.159
自分の人生が自分の自由にならないように感じる	.239	-.022	.185	-.081	.147
友だちからいじめられたことがある	.009	.930	.014	-.096	-.144
仲間はずれにされたことがある	-.022	.858	.038	-.058	-.133
友だちから馬鹿にされたりひどいことを言われたりしたことがある	.054	.783	-.106	-.009	.199
友だちから殴られたり蹴られたりしたことがある	-.029	.492	-.054	.193	.199
学校で差別されたことがある	.034	.433	.304	.099	-.024
学校が居場所であるという実感がない	-.041	.111	.758	.047	.046
学校には友だちがいない	.013	-.051	.609	.027	.044
学校に行くことは時間の無駄だ	.055	-.036	.534	-.117	.229
親から殴られたり蹴られたりしたことがある	.080	-.017	-.013	.912	.037
学校の成績がよくない	-.146	.017	.145	.079	.488
自分の人生には、スリル（興奮）が不足している	.096	-.069	.110	-.051	.201

抽出法：最尤法。回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法。7回の反復で回転が収束しました。